

家族ネットワーク通信

□発行所□

一般社団法人
「交通事故被害者家族
ネットワーク」
電話・03-6661-1575
FAX・03-6661-1585
東京都中央区日本橋人形
町1-13-9
藤和日本橋人形町コープ
1004号室
http://www.jiko-kazoku.com
info@jiko-kazoku.com
1部150円

第20回日本意識障害学会 参加レポート報告



9月2日/3日 第20回日本意識障害学会 青森県弘前市

第一回全国被害者支援集会

第一回被害者支援集会のご案内です。

■平成23年10月23日(日曜日)

■12:30~17:00 その後懇親会あり(別途参加費)

■東京シティエアターミナル1階ホール(TCAT)

■参加費 一〇〇〇円/一家族

右記の通り、支援集會を行います。会員の方は、後日送付される案内状に同封されている参加申し込み用紙でお申し込みください。非会員の方は、当会まで電話もしくはメールでお申し込み、ご相談ください。

プログラム内容(変更になる場合もあります)

■高額獲得判例の実績をもつ弁護士による「無料法律相談会」

■弁護士による「後見人問題講演」

■分科会

- ・自賠責問題体験談話
- ・民事問題体験談話
- ・一級建築士による介護住宅指何
- ・高次脳機能障害介護家族の語りの部屋
- ・遷延性意識障害介護家族の語りの部屋
- ・その他

参加お申し込み状況により、右記内容は変更する場合がありますのでご了承ください。

参加レポート (投稿・佐藤理事長)

今年の意識障害学会は9月2日・3日の両日、青森県弘前市のベストウエスタンホテルニューシティ弘前を会場に行われました。

弘前には半世紀以上前「五能線」の列車に揺られるのんびりと日本の海岸を眺めながら、桜まつりの時に一度行ったことがあり、みごとに咲きほこった「しだれ桜」に感銘した記憶があります。今回は東北新幹線で、読みかけだった太宰治の「津軽」を読破するには適度な所要時間でした。



さて、今年のメインテーマは「治療におけるブレイクスルー 看護におけるスタンダード」でした。二日間のほとんどをB会場でのセッションを聞いていたのですが二日目の最終セッションだけはA会場で行われた特別セッション「災害時の対応」に移動しました。そこで話されたことは最悪の事態を想定した日頃の訓練や備品の備蓄が大切であることが、東北療護センターと千葉療護センターから発表されました。

今回の震災は、地震とそれに伴う津波さらには原発事故による放射能汚染という災害に見舞われ、中でも津波により2万人及ぶ死者・行方不明者という大災害になりました。3月11日当日は首都圏でも帰宅難民がでたり、通信手段が通じなかったりと大混乱をきたしました。当日の朝、秋田に着いた私も自宅と連絡が取れたのは翌日になっ

てからでした。

計画停電が発表されて、まず考えたのは人工呼吸器を装着している息子を緊急避難させることでした。自家発電機が無く大容量のバッテリーも手に入っていないので、在宅になるまでの8年間入院していた大病院に入院させました。6月には東電から1年間の期限付きで自家発電機が貸与され、大容量のバッテリーも入手しました。

自然災害はいつどの様な形で襲ってくるか想像もつきません。想定外の災害を念頭にそれぞれの事情に見合った対策を考えシミュレーションを積み重ねる必要性を強く感じました。

最後に、初日の懇親会では津軽三味線とサクソ奏者としても名高い音楽運動療法の野田療先生によるセッションがあり和製ジャズともいえる心に響く音を楽しむことができました。

東日本大震災 障害者の死亡率高く 元養護学校校長が調査

参考記事・毎日新聞より

9月15日

福島県の元養護学校校長が、東日本大震災による障害者の被災状況の実態調査を進めている。県沿岸部の津波被災地を中心に足を運んで31人の当事者や家族から聞き取ったところ、人工呼吸器を装着しているため避難に手間取ったとみられる障害者や、スロープがないため逃げ遅れた恐れのある車椅子利用者などがいた。自治体への調査では、身体障害者の死亡率はそうではない人より3割高かったといい、「あと少しの支援があれば、教訓を生かしたい」と切実な思いを語っている。【町田徳丈】

調査しているのは、00~03年に県立平養護学校校長などを務めた県庁字図書館(福島市)館長の中村雅彦さん(65)。震災後、教え子の安否確認を進めるうち、「ささやかな幸せを感じていた人たちの日常がなぜ奪われたのか」との思いに駆られ、調査を始めた。

教え子のほか、各地の民生委員らを訪ね歩き、視覚障害8人▽聴覚障害5人▽知的障害9人▽自閉症3人▽車椅子利用6人等の10~80代計31人の状況を調べた。このうち知的障害者3人と車椅子利用者2人が亡くなっており、中村さんは家族らの話から「津波が原因だった」とみる。

車椅子生活だったいわき市の30代男性は、親族が助けに向かったが、目前で津波にのみ込まれた。重さ約4.5キログラムの人工呼吸器を付けていたが、隣住民には障害が重いことを知られておらず、避難に手間取ったようだった。同じく車椅子を利用して浪江町の60代女性は夫の留守中に津波にのみれ亡くなった。夫は「高さ約40センチの玄関から外に出るスロープがなく、戸惑っている間に津波が来たようだ」と涙をこぼしながら語った。

知的障害がある相馬市の10代男性も、津波の犠牲になっていた。母親によると、いつも一緒にいる祖母が道路に散乱した屋根瓦を片付けていたため、逃げずに自室にとどまったという。中村さんは「軽度の知的障害者は自分で買物できるが、災害時に自分で判断して避難するのが難しいことを改めて痛感した」と唇をかむ。

中村さんはまた、県社会福祉協議会と共同で、新地町からいわき市まで福島県内沿岸10市町に、身体障害者手帳を持つ障害者のうち、6月末時点での震災死者数や障害の種類を尋ねた。

10市町の昨年10月時点の人口は52万7639人で、震災死者は1673人。身体障害者手帳の所持者2万5577人(昨年4月時点)のうち亡くなったのは102人。死亡率は0.40%で、持っていない人の0.31%の1.3倍だった。102人の内訳は身体障害60人▽内部障害(心臓、腎臓、呼吸器の疾患など)26人▽視覚障害10人▽聴覚障害6人。このほか知的障害者9人と精神障害者7人も死亡していた。

調査は今も続けており、「障害者がいる家庭に普段から声をかけるなど支援システムの構築が急がれる」と中村さん。「知的障害者に小さな時から『海のそばにいて地震があったら津波が来る。すぐ高台に逃げて』と繰り返し教える必要がある」と悔やむ。調査結果をまとめて、教育、行政の現場で共有したいという。

妻が事故で全身不随 日記18冊体験語る

まぶただで会話 動画配信

交通事故で全身不随になり、唯一動かせるまぶただで「会話」する富山市の松尾幸子さん(67)の夫、幸郎さん(76)が7日、インターネットの動画共有サービスUSTREAM(ユーストリーム)で、事故や裁判での体験を語った。交通事故の被害者らでつくる「交通事故被害者家族ネットワーク」(東京都中央区)が企画。生放送で配信された動画は同ネットワークのホームページ(H.P.)で再生することができる。

富山・松尾幸郎さん

幸子さんは06年、富山市内で車を運転中、センターラインを越えてきた対向車と衝突。自分で呼吸したり食事をするのができなくなった。唯一まぶただで自分の意思で動かせる。そのまぶただを補助機上の平仮名を拾う。これが2人の「会話」方法だ。

一方、同ネットワークの広報担当の柳原三佳さん(48)らが今年3月に結成された「当事者の生の声を多くの人に聞いてもらいたい」と企画。8月の初放送を皮切りに、これまで娘(当時14歳)を亡くした北海道の夫婦が調書開示の必要性を話したり、長男(当時11歳)が犠牲になった東京都の男性が歩車分離信号の大切さを話している。

同じ境遇 手助けに



机に置いた日記などを使って体験を語る松尾さん(右)と柳原さん—富山市内で

原さんに連絡。生放送で書き始めたが、裁判で陳述書を書くときは、柳原さんと対談した幸郎さんが事故当時の話や、幸子さんと話した。また、刑事裁判で判決の「相場」を知ったときのむなしさ、民事裁判で感じた保険会社の損害賠償の払い方についても疑問を投げかけた。

収録後、幸郎さんは「目の前に人がいる講演とは勝手が違ったが、柳原さんと一緒にうまく話せた」と安心。「当事者が語ることで、同じような境遇の人の手助けになったり、交通事故の抑止につながればと話した。これまでの放送は、同ネットワークのHP(<http://www.jikokazoku.com/>)で見ることができる。

USTREAM出張ライブ放送報告 9/7・9/8



松尾幸郎さん(富山)



水谷敦重さん(新潟)



松原トミさん(新潟)

松尾幸郎さん(富山)

いつもダンディな松尾さん。今回お会いするのは、二回目でしたが、奥さまの介護に忙しい中、ライブ中継の為に時間を作ってくださいました。松尾さんは、この動画配信に非常に積極的に、ご自身から出演のお申し出があり、今回の富山・新潟出張ライブのきっかけにもなりました。裁判資料や奥さまの言葉を記録した「巻子の言葉」を机に置いて並べて、介護の過酷さ、裁判の不公平さ等を説明されました。松尾さんや我々家族ネットの活動が交通事故の「抑止力」になればと、いまも大学や警察学校、自動車学校で熱弁されています。

松原トミさん(新潟)

90歳とは思えない元気いっぱいの松原トミさん。苦勞を苦勞と思わせないお話し方には、守るべき大事なものを守ってきたというその気概が感じられました。畏怖堂々にも思えるトミさんが、放送会場にもってこられた一冊の週刊誌(トミさんの事件が載った週刊朝日)は茶色に変色し、時の流れを感じずにはいられません。日々の日常の挨拶に始まり、誰よりも早起きをして洗濯をするというトミさん。苦勞した時にお世話になった方から頂いた「ありがとう」という自筆の言葉を墓石に刻んだというお話し。まさに「誇り高き日本人ここにあり」忘れていたものを思い出させていただけると貴重な放送となりました。交通事故事件という反面、人生訓として見ていただきたい放送です。

水野敦重さん(新潟)

水野さんが自ら選んだ放送のオープニングの曲はフジ子ヘミングの「奇跡のカンパネラ」。難聴を乗り越えたプロの姿に感動されたそうです。水野さんも、片足切断という重度の障害を負いながらも、困難を克服されています。また、トミさんを迎えに行く際の車は水野さんが運転される車。高齢のトミさんのために乗降用の踏み台まで車に積んで来られるというお心遣いまでいただきました。ご自身で徹底的な現場検証を行い、国会図書館にまで調べに行ってきたという行動力には脱帽です。10年かけてご自身にかけられた嘘の過失を逆転させました。

《編集後記》

記録に残る猛烈な台風が過ぎ去り、すっかり秋めいてまいりました。地域や学校の体育祭が開催され、何気ない毎日が過ぎていきます。日々何事も無く生活できることのありがたさを感じる今日この頃です。

とはいえ、9月は移動の多い月でしたので、地方地方でたくさん交通事故の話が聞きました。できる限り動画の記録に残し、そして経験者が語る姿が、不運にも新たに交通事故に遭われた方々の参考になれば幸いです。

取材中は、藁をもつかむ思いで必死になって介護や裁判に追われ、悲壮感、孤独感に苛まれた日々を思い出さずにはいられません。過酷なことには変わりありません。

会員の方々も今だから話せること、今になって話したい事々々あると思いますので、動画撮影にはドシドシお申し込みください。カメラやマイク、パソコンをもって取材に伺います。



出張ライブに持ち運ぶ機材です。2つのキャリーバックに入れて運びます。

さて、10月23日は当会の第1回全国被害者支援集会です。左記の通りの団体から協賛を頂きました。

NPO法人日本脳外傷友の会/NPO法人脳外傷友の会「ナナ」/NPO法人東京高次脳機能障害協議会/高次脳機能障害者者の会「ハイリハ東京」/頭部外傷等による重度後遺障がい者と家族の会「わかば」/高次脳機能障害がい者活動センター「調布ドリーム」/全国遷延性意識障害者・家族の会/高次脳機能障害者を支える会「こもれび」/後天性脳損傷の子どもをもつ家族の会「アトム」(順不同)